

設立 40 周年を前に人材育成を強化 「大きな転換点」を乗り越えてさらなる発展へ

芝山町に本社営業所を構える㈱石橋梱包運輸（佐藤俊幸代表取締役社長）は、成田空港で取り扱う貨物量の増大および周辺の工業団地群への物流ニーズの増大に応えるべく、輸送業務の拡大を図るとともに、梱包事業や倉庫事業などにも進出。トータルな物流サービスの提供を続けるとともに、輸送品質向上への取り組みを積み重ねてきた。

2年後に控える設立 40 周年を前に、大きな転換点を迎えつつある同社では、佐藤社長を先頭に、「物流の 2024 年問題」をはじめとした諸課題の解決に向けて、全力で取り組んでいる。（取材日：令和 5 年 7 月 6 日）



社名が大きく目立つ同社のトラックの前に立つ、佐藤社長（右）と石橋取締役（左）

■「週休2日制導入」など従業員の処遇改善を加速 地域貢献にも積極的に取り組む

㈱石橋梱包運輸は、先代社長である石橋正好取締役会長によって、昭和 60 年に設立された運送会社である。

設立当初は、同社は荷主である段ボール工場の専属運送会社として、段ボール輸送を主体としていた。そうした歴史があり、同社の社名には「梱包」の言葉が付加されている。事業を継続するに連れて、「当社と取引のある荷主が 1 社だけというのは経営面でリスクが高い」と考えた石橋会長は、段ボールの輸送先である着荷主に対して営業活動を進め、徐々に取引先を拡大していった。現在同社では、工業用精密機械や住設関連商品、プラスチック製品などの輸送を手がけている。なお、運送事業に関しては、芝山町に構えている本社営業所のほか、同業他社からの事業譲受に伴い、近いうちに茨城県神栖市に新営業所を開設する予定である。

一方、「体力的に乗務が難しくなった高齢ドライバーに、当社で引き続き活躍できる場を提供したい」という石橋会長の考えから、平成 4 年に芝山町内に梱包工場を開設。梱包工場では、小型精密機械から大型機械まで、様々な荷物の梱包作業を手がけている。また、同社では倉庫事業や保険事業、車両整備事業なども行っている。

同社では、創業者である石橋会長の「積んで喜び・走って喜び・納品して喜んでもらう」とのモットーの下、荷主の期待に応えられる運送会社であり続けるために、輸送品質向上への取り組みを進めてきた。事故防止に向けた取り組みでは、同社では 10 年ほど前から、安全輸送の実現に向けたミーティングを実施し、安全意識高揚を図っている。

「かつては毎週土曜日にミーティングを行っていましたが、コロナ禍を受けて現在では毎月第 2 土曜日にミーティングを行っています。ミーティングの頻度を毎週から月 1 回にしたことで、より密度の濃い教育を行うことができています」（佐藤社長）

同社では長距離輸送も行っていることもあり、全ドライバーが一箇所に集まる機会はほとんどない。その上、コロナ禍の影響で、対面で安全指導を行うことも難しくなった。そうした状況下でも事故防止に向

けた取り組みを強化するために、同社では今年から、Web 教育システム「ロジボケ」を新たに導入した。

これは、パソコンやスマートフォンなどから利用可能な運送業界向け安全教育サービスで、ドライブレコーダーから取得したヒヤリハット映像などの教育動画を見ることができるほか、テストを出題し、事故防止への知識定着を図ることもできる。同社では全ドライバーにスマホを貸与しており、運行途中の休憩時や、自宅などで過ごす休日に、「ロジボケ」による安全教育を受けられる体制を整えている。

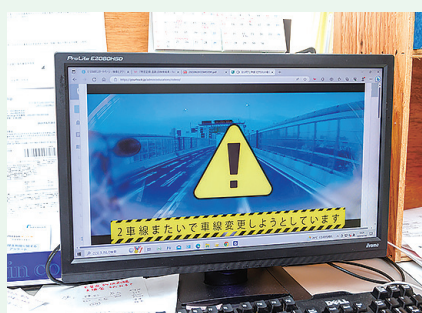
一方で、同社では従業員の処遇改善に向けての取り組みも進めている。3 年ほど前から、同社では全従業員を対象に週休 2 日制を導入したことで、年間休日日数が 120 日以上と増加。週休 2 日制導入によって土曜・日曜と祝日が休日となり、ドライバーからは「プライベートの予定が立てやすくなった」と好評だという。また、ミーティングに出席したドライバーは休日出勤扱いとされ、休日手当が支給されるため、ドライバーの手取り額増加にも繋がっている。

「当社では、従業員の処遇改善を図ってきたことで、定着率が大きく改善しています。また、高校新卒生の採用も進めるなど、若年層獲得にも取り組んでいます。現在、当社のドライバーの平均年齢は 48 歳程度ですが、最も若い人では 24 歳のドライバーが在籍しており、近年では若い方が当社の門を叩いてくれるようになってきました。業界未経験で入社する新人ドライバーが増えてきたこともあり、当社では新人ドライバーへの安全教育に力を入れています。また、会社負担で新人ドライバーに大型自動車運転免許を取得させるなど、新人ドライバーに対する支援も強化しています」（同）

また、同社では地域貢献に関する取り組みも数多く行っている。その中でも出色なのは、トラックへの AED（自動体外式除細動器）と消火器の搭載である。



佐藤 俊幸 代表取締役社長



今年から導入した Web 教育システム「ロジボケ」では、インターネット上で教育動画などを閲覧することができる



同社のトラックには、AED（自動体外式除細動器、写真）や消火器を搭載させるなど、不測の事態にも対応可能である



従業員のことを大切に思っている佐藤社長。今後も従業員を大切にしながら、同社の新たな未来を築いていく

AED は平成 29 年から搭載を開始しており、AED を搭載したトラックには目立つように車体にシールを貼り付け、AED を搭載していることを市民などにアピールしている。また、ドライバーには普通救命講習を受講させており、一刻を争う緊急時にもスムーズに人命救助を行えるようにしている。

一方、同社のトラックは梱包資材など燃えやすいものを輸送することが多いことから、同社では全車に消火器を搭載。また、消火訓練も年に 1、2 回実施している。3 年前に荷主先で小火（ぼや）が発生した際には、同社のドライバーが車両に搭載してあった消火器を使い、いち早く消火活動を行ったという。

そして、27 年 7 月からは、毎月第 2 土曜日のミーティングに合わせて「ゴミゼロ運動」を展開。本社営業所近くの国道 296 号などで美化活動を実施。従業員が心をひとつにして同運動に取り組むことで、ドライバー同士のコミュニケーション良化に繋がり、離職率が下がるという副次的効果もあったという。

さて、佐藤社長は高校を卒業後、同社設立の 2 年ほど前に石橋会長に会い、石橋会長の下でトラックドライバーとしての経験を積み始めた。その 5 年後には、配車係になると同時に、27 歳という若さで同社の役員に就任し、石橋会長の片腕として仕事に汗を流した。15 年から東京都でディーゼル車規制が実施された際には、同社でも所有車両の 8 割を入れ替えたため、「当時は経営的にも非常に苦しかった」と佐藤社長は振り返る。

29 年 9 月 1 日に、先代社長である石橋会長から社長の座を引き継いだ佐藤社長（当時 53 歳）は、当時大きなプレッシャーを感じたという。しかし、高校卒業以来長年に渡って同社で世話になった恩義があり、また社長就任を断るだけの理由もなかったため、佐藤社長は「自分がやるしかない」と決意を固めた。

佐藤社長が同社の経営を行っていく中で最も重視したのが、「将来会社の中核を担っていくことのできる人材をいかに増やしていくか」ということである。

同社ではかつて、経営的に足踏み状態が続いた時期があった。この

状態は、会社のこれまでの経営の仕方を変えなければならないというシグナルである。社長就任以前から佐藤社長は同社の内情を熟知しており、実質的なトップとして会社の業務を回してきた。しかし、会社の将来を考えると、社長一人が全責を負うのではなく、次の世代を育て、徐々に権限を委譲していき新陳代謝を図ることで、足踏み状態から脱して飛躍を期す必要があったのである。佐藤社長は「リーダーにとって最も重要な仕事は、次世代のリーダーを作ること」と考え、会社の生き残りを賭けて人材育成に力を注いだ。

佐藤社長が社長に就任してから 6 年が過ぎ、現在では石橋会長の息子である石橋大樹取締役業務管理部長（32 歳）を筆頭に、優秀な人材が育ってきた。佐藤社長は、「社長に就任した当初は大きなプレッシャーを感じていましたが、周囲の人々に恵まれたおかげで、社長就任以降はそれほど大きな苦勞を感じることもなく、ここまで経営を続けることができました」と、社長就任以降の 6 年間を振り返った。

同社は現在 38 期目を迎えており、2 年後には 40 期という大きな節目を迎える。こうした中で、同社には今まさに大きな変化が訪れようとしている。

同社の本社営業所からもほど近い成田国際空港では現在、空港の機能を強化する計画が進んでおり、3 本目の滑走路となる C 滑走路を新設することになっている。C 滑走路予定地が同社の本社営業所の敷地にかかることから、C 滑走路の新設工事に合わせて同社の本社営業所を移転する必要があるのである。

「C 滑走路新設工事に伴う本社移転や『物流の 2024 年問題』など、当社を取り巻く環境が激変しつつあります。当社としては、この数年が将来の飛躍に向けての大きな転換点と位置づけ、事業に適進していきたいと考えているところです。当社の移転が滞りなく進むとともに、『2024 年問題』が無事に解決に至り、当社を取り巻く諸課題を乗り越えた上で 40 周年を迎えたいと考えています。それとともに、今後も従業員を大切にしながら 50 年、60 年と事業を継続できるように、次世代を担う優秀な従業員たちとともに、様々な取り組みを進めていきたいと考えています」（同）

ホットにゆーす

■モータースポーツの疾走感に魅力を感じ 会社の仲間たちとロードレース観戦へ

佐藤社長の趣味は、モータースポーツである。

もともと車を改造したり、オートバイでツーリングに出かけることが好きだったこともあり、佐藤社長は若い頃からモータースポーツにも強い関心を持っていた。

モビリティリゾートもてぎ（栃木県茂木町、旧ツインリンクもてぎ）で開催される「MotoGP 日本グランプリ」などに同社の従業員とともに観戦に行くなど、疾走感あふれるオートバイのロードレースを観戦することも多いという。



数多くのモータースポーツが開催される「モビリティリゾートもてぎ（旧・ツインリンクもてぎ）」でタオルを掲げる佐藤社長（右から 2 人目）

企業プロフィール 株式会社 石橋梱包運輸

代表取締役社長 佐藤 俊幸
本社 千葉県山武郡芝山町大里 1529-1
従業員 110 人（うちドライバー 80 人）
台数 89 台